

龍谷大学世界仏教文化研究センター 2016年度学術講演会

講演名	出土文書と石窟銘文からみたウイグル仏教徒の巡礼活動
開催日時	2016年7月22日（金）16:00～17:30
場所	龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
講演者	松井太氏（大阪大学大学院文学研究科准教授）
司会	入澤崇氏（龍谷大学文学部教授）
主催	龍谷大学仏教文化研究所（西域文化研究会）
共催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
参加人数	18人

【講義のポイント】

中央アジアにおけるウイグル民族の行跡は、広域な活動をしていることが知られているが、不明な点も少なくない。これまで、Peter Zieme氏や森安孝夫氏が明らかにされてきた古ウイグル語文献に見える仏教文献だけでなく、世俗文書からウイグル仏教徒の社会を考える必要がある。特に敦煌の莫高窟、榆林窟などに残されているウイグル語の銘文を手掛かりに、ウイグル民族の足跡と信仰形態を考える。

【講義の概要】

■はじめに

8世紀中葉、モンゴル高原に成立したウイグル帝国は、当時はマニ教を受容していたことで知られている。後に西ウイグル王国（9世紀～13世紀）を東部天山地方に築き、やがてマニ教を捨て仏教に改宗する。ウイグル民族が残した文献は、新疆トルファンから敦煌まで広く流布し発見されている。主に仏教文献が多く、ウイグル仏教徒が広域にわたって活動していたことの証左となっている。

■ウイグル仏教徒の広域活動

大都、江南（ユーラシア大陸の東）で印刷されたウイグル語仏典、敦煌から出土したウイグル語書簡の内容などから「ウイグル＝コネクション」と呼ばれる広範囲の商業・人的ネットワークが存在したと考えられ、モンゴル帝国時代に多くのモノ・文化が移動していた。

■ウイグル仏教徒の巡礼をめぐる諸問題

敦煌北区で出土したモンゴル語文書と、トウルファン出土のモンゴル語文書は、同じ筆跡、奥書が認められ、内容から仏教徒の巡礼がなされていたことがわかった。文書の他にも、石窟寺院に描かれる巡礼者の題記銘文を読み解くと、巡礼圏の広がりや、人々の属性（僧侶、支配層、一般俗人）、信仰形態も知ることができる。また、落書きもその解読対象とした。

■敦煌で収集したテキストを紹介

2010～2015年の6年間で敦煌近辺の約800窟中、計129窟の銘文を回収した。西ウイグルからやってきた巡礼者のメモから、彼らが滞在していた期間、巡礼ルートを明らかにすることができる。中には五台山巡礼の途中で敦煌に滞在した者もいたようである。さらに、ウイグル巡礼者の足跡は呼和浩特（フフホト）の白塔にも確認される。興味深いことにフフホトには仏教徒だけでなく、キリスト教徒の名前を持つウイグル巡礼者も来ていた。また、イスラム教徒の名前のウイグル文字銘文も刻まれている。

【まとめ】

松井氏は、現地調査の結果から、ウイグル仏教徒の巡礼圏の広がりがある程度把握することができたと報告した。また、巡礼者の属性として、ウイグル人、モンゴル人が混在しており、立場の異なる地方政府の役人や使者もいたということを指摘した。

石窟での教誨（礼拝、祈祷、供儀を含む）もなされていたことを一次資料を提示し、題記銘文と仏教文献の関係を明らかにする今後の課題まで言及された。さらに、興味深いことは、キリスト教徒やイスラム教徒も巡礼に来ていた痕跡が見られる点である。なぜ、榆林窟や莫高窟に仏教信仰者以外の人々が来たのか。いまだ不明な点も残されており、今後の研究が期待される講演であった。

以上

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 金澤豊